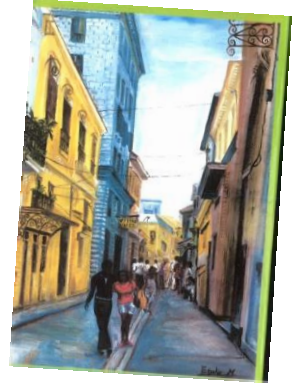


松尾威哉・著

キューバの光と影 ボランティア日本語教師三年の記録

岩垂 弘 キューバ友好円卓会議共同代表／ジャーナリスト



表紙

絵が趣味だった奥さんの悦子さん(故人)が、威哉さんを訪ねてキューバを旅行した際に描かれたもの。



授業風景

松尾さんは1928年に岩手県に生まれ、大学卒業後、高校教師、会社員などを経て、定年後はシルバー・ボランティアとしてボリビア、キューバ、ベトナムなどで日本語教育に携わった。キューバでは、1990年9月から1993年6月まで、ハバナ大学で日本語を教えた。本書は、その3年間にわたるキューバ生活の記録で、B6判、218ページ。刊行は1994年。松尾さんの

自費出版である。

本書によれば、ハバナ大学での日本語教育の生徒は12人。大学生は1人もおらず、大学教授のほか、技術者、日本商社勤務者、畜産専門家、観光局勤務者ら。年齢は30代が中心だったという。

昔も今も、長期にわたってキューバに滞在した経験をもつ日本人は極めて少ない。だから、キューバのハバナに3年間も定住し、その間、地域や大学で数多くのキューバ人と接した松尾さんの目に映ったキューバの現実、短期的な観光やビジネスでキューバを訪れた日本人の印象記とは違って、極めて興味深い内容となっている。

とりわけ印象深いのは、一般のキューバ国民の暮らしぶりを描写したくだりである。なぜなら、松尾さんが滞在した1990年代初期は、経済的な援助を受けていたソ連の崩壊によりキューバ経済が大打撃を受け、国民生活が極めて貧窮した、いわゆる「スペシャル・ピリオド」の時期であった。革命後最も苦しかった時期を、キューバ国民はどう過ごしたのか。この本は、そうした疑問に答えてくれる。

海をはじめとするキューバの自然の美しさや、古い街並みが続く古都トリニダを描写する文章は素晴らしく、読んでいるうちに、キューバの魅力に引き込まれてしまう。キューバに行ったことのない人は「ぜひ、一度行ってみたい」、行ったことのある人は「また行かなくちゃあ」という思いに駆られるに違いない。

巻末に、教え子2人から松尾さんに届いた手紙が掲載されていて、これも印象深い。1人は「松尾先生があらゆる困難に打ち勝ちながら、生徒達と一緒に頑張ってくれたのは本当に大きな、歴史に名を残すほどの功績であった。遠い母国から地理的に離れていても、日本そのものをキューバに文化的に、そして歴史的に近付けて、それを通じてキューバと日本の友情史に新しい1ページを書き加えられた」と書き、もう1人は「先生のこの本はキューバのことを知るのに理想だと思う」とつぶっている。

※購入希望者はキューバ友好円卓会議 (FAX 03-3415-9292 e-mail:cuba.entaku.0803@gmail.com) へお申し込みください。送料込み2000円でお分けします。



松尾威哉さん

報告

2015年度 収支報告 キューバ友好円卓会議

収	前年度繰越金	1,478,001	支	通信費	207,350
	会費	265,000		印刷・事務費	16,120
	寄付	101,873		会場使用料	98,136
	フォーラム参加費	66,500		講師等謝礼	40,000
	事業収入	284,119		雑費	19,289
	物販収入	11,200		振込手数料	972
	ツアー代金	6,545,500		HP管理料	10,500
	利息	295		ツアー関連	6,545,500
	計	8,752,488		計	6,937,867
入	※次年度繰越金	1,814,621	出		

キューバのサンクティスピリトスで

日本語、日本文化講座の開設するプロジェクトのご紹介

松尾 光 あきら

4月からキューバのサンクティスピリトスで活動を計画しています。

このたび「サルー！」にキューバでのこのプロジェクトについて継続して書かせていただきます。まずご挨拶です。プロジェクト名は「サンクティスピリトス県に日本語、日本文化講座の開設する」です。

私は日本経済新聞社でIT技術者として30年近く勤務して、3月31日に退社しました。

仕事とは無縁なキューバ行きを決めた経緯は、今から25年前に父、松尾威哉がハバナ大学に日本語講座を開設したことからさかのぼります。本紙11ページの『キューバの光と影』をご覧ください。

そして2年前、「キューバ友好円卓会議」の方から紹介していただいたルイス氏 ※注 との出会いが決定的になりました。ルイス氏との出会いの前にも、偶然の出会いがいくつ



昨年12月19日のキューバフォーラムでプロジェクトについて話す松尾さん

も重なり、サンクティスピリトス行きに運命的なものを感じています。

サンクティスピリトスでしようと考えている3つのことを以下に紹介します。

1つ目は、私が日本語を教えることを通じて日本の生活、芸術を理解していただき、新たな仕事を得る可能性が広がることをキューバの若者にわかっていただきたいと思います。日本政府の費用で日本に留学するサンクティスピリトスの若者を3年で3名育てたいと思っています。

2つ目は、私がスペイン語を学び、キューバの文化を理解したいと考えています。私は音楽が好きでピアノや歌を長年勉強してきました。日本の音楽を紹介して教え、キューバの音楽を学んで交流ができないかを考えます。

3つ目は、このプロジェクトを持続可能な活動にすることです。3年間は国際交流基金の支援をうける予定ですが、4年目から自立しなければなりません。4年目から、毎年受講者を募集できる指導者の体制をつくり、活動資金を継続して得る仕組みを作ること。日本の企業や個人の寄付を募る方法を考えられています。

現地に行かなければわからないことが、まだたくさんあります。すべてが無駄になるリスクをはらんでいます。でも失うものは無いとの気持ちで取り組む覚悟です。皆様のご支援も期待しています。よろしくお願ひします。

※IT技術者、32歳。18歳の時、アニメから日本への興味が始まり、日本のサブカルチャーにのめりこみ折り紙、囲碁、盆栽、茶道に関心を持つ。

キューバの民宿でホームステイ体験

川口匡子／中野慧 (福岡県福岡市)

以下の情報はすべて筆者の宿泊時(2015年9月)のものです。

2015年9月上旬、5泊7日の弾丸ツアーでキューバを訪れ、カーサ・パティクラールという民宿に宿泊した。こちらの民宿のオーナー夫妻は、私たちの拙いスペイン語に辛抱強く付き合ってくれたり、キューバの文化や歴史について教えてくれたりと、親切な人たちだった。5泊もすると、私たちはすっかり夫妻の娘気分。"帰省"を約束し、涙を流して別れた。



民宿のオーナー夫妻、デボラ&ベベと中野。キューバに実家かできた気分。今も季節の挨拶メールが届く



宿の前の道。子供達がサッカーをしていたり、おじさんたちがダラダラおしゃべりをしていたり和生活感満載だった。



晩御飯は15CUC前後。メニューによって値段が変わる。この日のメニューはチキン。足が丸ごと2本分! 半分を食べたところでギブアップ。残りは冷蔵庫で保管し、2日分の晩御飯に。次の日の晩御飯からは量を半分にしてくれ、とお願ひした。朝食朝ごはんは5CUCでフレッシュフルーツが山盛りと、搾りたてのジュース、チーズトースト3枚と、卵2個、それに美味しいコーヒー。完食すると、1日満腹!



客室の奥は高い天井の気持ちいいスペース。インテリアの趣味も面白い



キッチンには電子レンジやコンロなどもあり、自由に使っていいと言われた。時差ほけでお腹を空かせ、夜中にカップヌードルなどを作れて便利だった。バス、トイレともは掃除が行き届いており、清潔。個室も綺麗だった。

宿情報 CASA DVIP (カーサ ディーヴィップ)
住所: Calle Amistad 159, Apto. 2, Entre Neptuno y Virtudes, Centro Habana, Ciudad Habana

住宅街のど真ん中。ヘミングウェイお気に入りのダイキリを出すフロリディータから徒歩5分、徒歩3分圏内にダンススタジオ、スーパーあり。3部屋あり。予約状況により、他の旅行者とバスルーム共用も。

電話: +53 867 4118 携帯: +53 53 588 431
※スペイン語かロシア語のみ、現地のインターネット事情が悪く、予約は電話が確実。空港から宿までの送迎も約25米ドルで手配してくれるので、早朝の出発でも安心。

値段: 1室30CUC(約30米ドル)、2人で泊まれば1泊1人あたり約15米ドル

casa particular

(カーサ・パティクラール)

キューバの一般家庭の一室を外国人に貸し出す形態の宿泊施設。筆者らが宿泊した宿のオーナーによると、現地の人々が貴重な外貨を得る手段の一つであるが、開業には建物の基準検査や書類提出など政府からの許可が必要という。近年開設する人が増えているといい、街中のあちこちで、カーサであることを示す船の錨が逆さまになったような青いサインを目にすることができる。